

アユ資源の状況について

1. 2025年秋の産卵状況

- 8月～10月に主要河川で産卵調査を実施。
- 主要河川の産卵場における2025年の有効産卵数(=死卵を除く)は40.7億粒で、平年の61.8%となった(図1)。
- 姉川での産卵が少なく、知内川での産卵が半数を占めた。

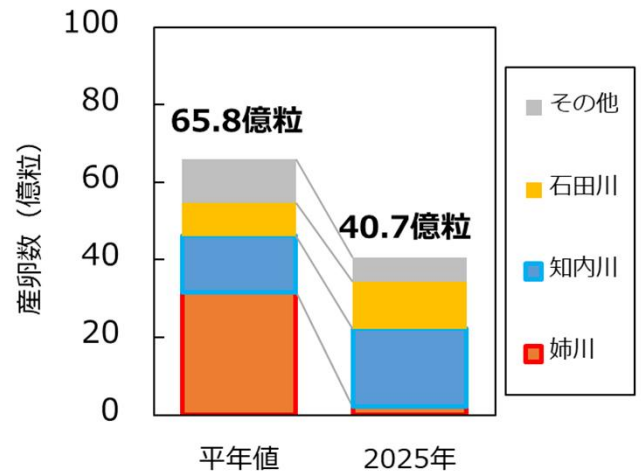


図1 有効産卵数の河川別比較

2. アユ仔魚(ヒウオ)のふ化日組成

- 高水温の影響で天然産卵の盛期が10月になったこと、産卵用人工河川から仔魚の流下のピークを琵琶湖高水温の影響を回避するため例年より1週間程度遅らせたことで、仔魚全体のふ化日組成も例年より遅い10月上旬から中旬にピークを形成(表1、図2)。
- エリ漁解禁当初の12月に漁獲の主体となる9月生まれの仔魚は相対的に少なかった(図2)。

表1 天然河川における産卵調査結果

	第1次調査	第2次調査	第3次調査	第4次調査	第5次調査	合計
調査日	8/25-8/28	9/8-9/11	9/22-9/25	10/6-10/9	10/20-10/24	
産卵数(億粒)	0	10.1	13.9	16.5	0.2	40.7
ふ化時期	9月上旬	9月中下旬	10月上旬	10月中下旬	11月上旬	

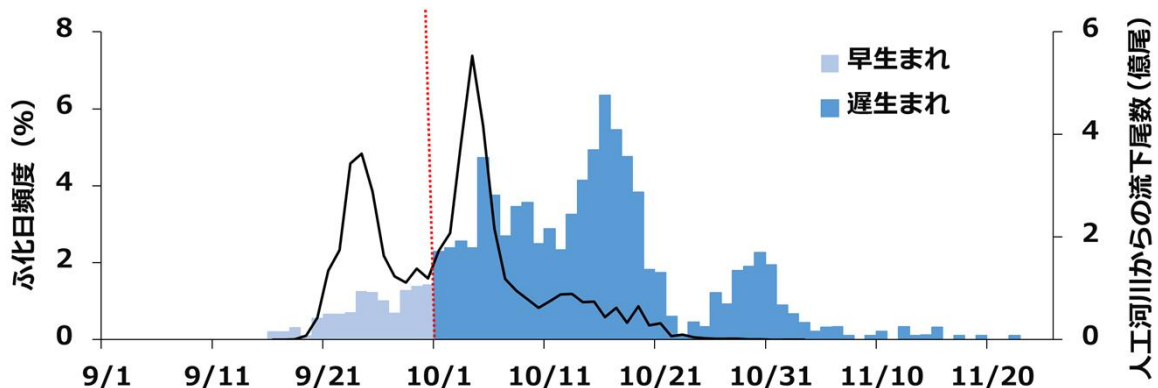


図2 2025年生まれのヒウオのふ化日組成 ※折れ線(右軸):人工河川からの流下尾数

3. エリ漁によるアユの漁獲状況

- 12月1日から解禁したアユ漁では、漁獲量は例年と比べて低調に推移(図3)。
- 産卵数が少なく、特に9月生まれのアユが少なかったものの、これらの成長が良いことが昨年ほどの不漁に見まわられていない要因と推定。

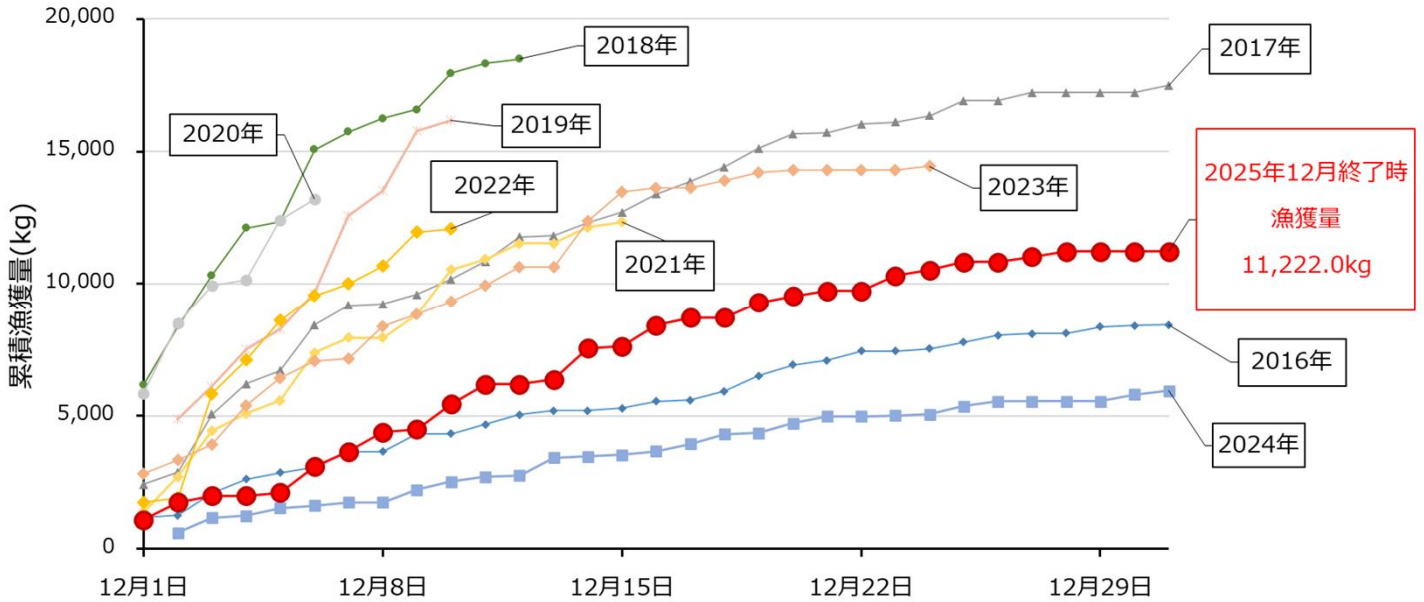


図3 活アユ漁獲量の推移 (12月末まで)

4. 魚群探知機による調査

- 1月から調査船の魚群探知機を用いて、①水深30m等深線上の周回コースの魚群数による評価、②横断コースで北湖全域を対象とした推定資源尾数による評価を行っている。
- 1月にはどちらの調査においても資源水準は平年の6割程度と評価された。2月には魚群数の調査では平年を上回ったが、資源尾数の調査では平年の7割程度と評価された。

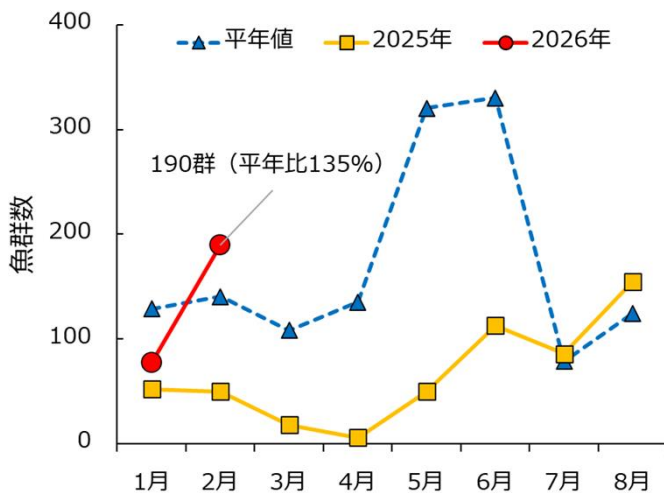


図4 魚群数の推移

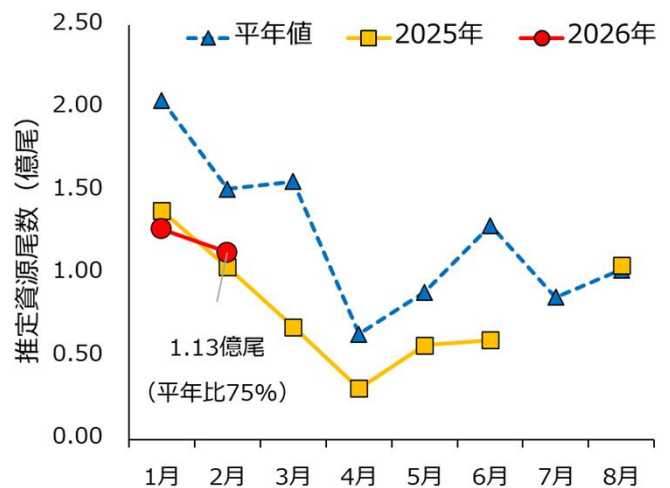


図5 推定資源尾数の推移

5. 琵琶湖の餌料環境（プランクトン）

- ヒウオの初期餌料のノープリウス(ケンミジンコ類の初期幼生)の生息密度は、10月から1月中旬までは高かったが、1月末以降は平年並みで推移した(図6)。
- 体長15mm以上のヒウオの餌になると考えられるケンミジンコ類の生息密度は、10月から12月までは高かったが、1月以降は平年並みで推移した(図7)。
- 体長20mm以上のヒウオの餌になると考えられる大型ミジンコ類の生息密度は、12月までは低かったが、1月以降は平年より高い値で推移した(図8)。

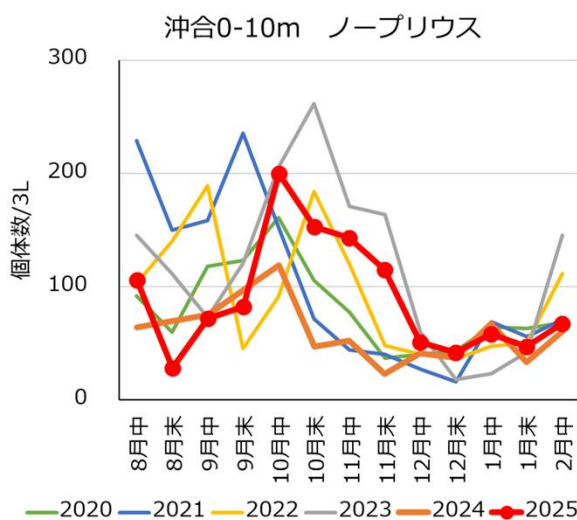


図6 ノープリウス幼生の生息密度

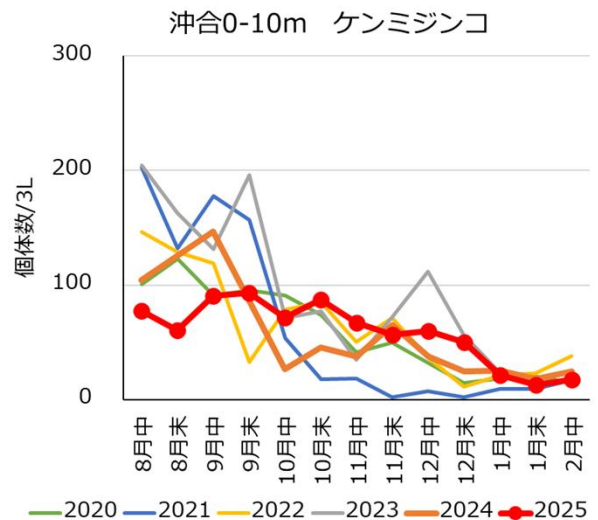


図7 ケンミジンコの生息密度

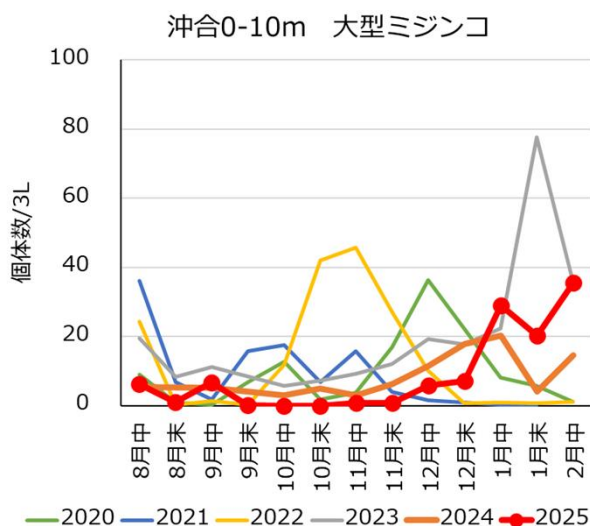


図8 大型ミジンコの生息密度



6. まとめ

- 湖中のヒウオのふ化日組成は10月中旬生まれの割合が大きいことから、漁獲サイズに達していないヒウオが一定数生息していると考えられる。これらが順調に越冬できれば春以降の漁獲に貢献すると期待される。